

令和元年度 第10回

宮城県塩釜高等学校 卒業証書授与式

令和2年3月1日（日） 統合されてから10回目となる卒業証書授与式を挙りました。

同日は、新型コロナウイルスの感染拡大を受け、校内放送による実施となりました。

竹内透 校長は式辞の中で、「自分を知り、他人の弱さや欠点を認め合う気持ちが、寛容の精神に繋がり進歩や成長の出発点となる。みなさんの将来が幸せで潤いのあるものであることを心から願います」と述べられました。

式典は直前まで、例年どおり準備を進めておりましたが、慎重に検討した結果、感染防止対策を講じるという判断から、各教室での開催といたしました。卒業式を楽しみにしていた生徒並びに保護者の皆様にご理解いただければ幸いです。

卒業した生徒のみなさんが、進路先で活躍されることを職員一同お祈りしております。



＜教室での卒業証書授与の様子＞



校内放送による式辞の様子



教室での卒業証書授与の様子（普通科）



卒業生代表の答辞



ビジネス科の様子



新型コロナウイルスの影響により、様々な学校行事予定の変更を余儀なくされております。それに伴い、ホームページの掲載が遅くなりましたこととお詫びいたします。なお、竹内透 校長先生は、令和元年度をもちましてご退職なされました。

校長式辞

2020.3.1 竹内 透

今年は文字通り異常な暖冬で、県内の豪雪地帯でも雪が殆ど降りませんでした。本日ここに、第十回卒業証書授与式を挙げていくことは、本校にとって大きな喜びとするところであります。

さて、卒業生諸君。皆さんの門出にあたり、寛容の精神について、話をします。

昨年末、『男はつらいよ』という映画の新作が公開され、話題となりましたが、山田洋次監督がテレビのインタビューで、『社会全体から、寛容の気持ちが失われている』というような趣旨の発言をされていました。この映画は、簡単に言えば、東京の下町を舞台にした、人情喜劇です。多少問題のある主人公である、フーテンの寅さんに対する、人々の暖かな眼差しのようなものが、社会から消えつつあると、山田洋次監督は考えているようです。私も、そのように感じています。

次にネット社会です。インターネットの普及は、私達の生活に大きな変化をもたらしました。昔は、自分の意見を発信するには、新聞や雑誌に投稿するくらいしか手段はありませんでした。今では、ツイッターをはじめとするSNSで、簡単に、瞬時に、しかも匿名で、不特定多数の人たちに意見を発信することができます。良い面もありますが、危険もあります。あおり運転をした男の恋人だと間違われ、SNSで罵詈雑言を浴びせられた女性がありました。確かめもせずに犯人扱いするのも、さることながら、その遠慮の無い暴力的で幼稚な文面に、私は暗然としました。世の中には、確かに、許しがたい悪が存在するかも知れませんが、安っぽい正義感を振りかざす前に、他人の人格を全否定できるほど、自分が立派な人間か、自問してみるべきです。

生涯を通して、寛容の精神の大切さを訴え続けた人が居ます。渡辺一夫という、フランス文学者です。東大の教授を長く務め、ラブレールやエラスムスなど、ルネサンス期のヒューマニズム研究の第一人者として、また大江健三郎などの文学者に大きな影響を与えたことで有名です。その思想に、一貫して流れているのは、徹底した不寛容への批判です。『狂気について』という有名なエッセイの中で、彼は、冷静と反省とが、行動の準則とならねばならぬわけですが、冷静と反省とは、非行動と同一ではありません。最も人間的な行動の動因となるべきものです。と述べています。いかにも文学者らしい、格調高く、ちょっと難しい言い回しです。この文章が書かれたのは、戦後間もない頃で、当時の時代背景もあり、宗教や戦争といった、大きなテーマを扱っていますが、私達の日常生活にも、十分当てはまります。要は、熱くならず、よく考えてから行動しなさい、ということです。これは、言うほど易しいことではありません。あおり運転の例のように、人は時として、何かに取り憑かれたように、人を悪者にしたり、傷付けるのが正義だと、錯覚したり、してしまうものです。それを、渡辺一夫は、狂気と呼びました。寛容の精神の対極にあるものが、狂気です。余程注意していないと、私達は、不寛容という狂気に陥る危険があります。

渡辺一夫が、よく引用した、ヨーロッパの古い諺に、『人間は天使になろうとして豚になる存在である』というものが、あります。自分では立派なことをしているつもりでも、実は、それは卑しく愚かな行いであることが多い、という程の意味でしょうか。それほど、人間とは、不完全で弱い存在だ、ということです。

『無知の知』という、ソクラテスの言葉もあります。人間は全知全能ではない、という戒めでもあり、真理の追究は、分からないことを知ることから始まる、という哲学者の矜持でもあります。

私達は、己の弱さや、自分が完全ではないことを、よくよく自覚すべきです。そのことが、寛容の精神、優しさにつながりますし、進歩や成長の出発点ともなります。

皆さんは、これから、又は近い将来、社会に出ます。いいことばかりでは、ありません。もしかしたら、楽より苦の方が、多いかも知れません。漱石が『草枕』の冒頭に記した、『とにかくに人の世は住みにくい』は、残念ながら、昔も今も真実のようです。しかし、だからこそ人生は面白い、とも言えます。

住みにくくしているのは、同じ人間です。誰にでも、嫌な人は居ます。考え方が違っていたり、波長が合わなかったり、でも、人間です。機械でも猛獣でもありません。いつかは、きっと分かり合える、などとは言いませんが、チャンスはあります。自分のことを分かって貰うには、相手のことも理解しようという態度が大事です。相手に変わってほしければ、自分にも変えるべき点はないかと、考えてみる必要があります。これが、寛容の精神です。

気に入らないから無視しようとか、意地悪されたから仕返してやろう、などとは、思わないことです。憎しみからは、憎しみしか生まれません。不寛容に対してさえも、寛容になれる人が、本当に強い人だと、私は思います。

人は皆、弱いし、欠点も多い。それを認めた上で、自分の強みや長所を生かし、皆で支え合うのが、人間社会です。強い者だけが生き残る、そんなジャングルみたいな社会には、なってほしくありません。自分の弱さも、他人の弱さも、共に認め合う気持ち、寛容の精神を、忘れないで下さい。

これからの社会を担う、若い君たちへの、お願いです。

卒業生には、渡辺一夫が遺した言葉を中心に、寛容の精神について、話をいたしました。

一言、付け加えるなら、寛容と妥協は違います。叱咤激励も、それが愛情に裏打ちされたものなら、価値観の押し付けにはなりません。

不易流行。昭和の昔を懐かしむというのではなく、変えてはならないものも、あります。親として、人生の先輩として、伝えるべき事は、これからも自信を持って伝えて欲しいと思います。

卒業生諸君。お別れです。

情けは人の為ならず、といひます。人に優しい人は、人からも優しくされる、ということです。それが幸福の秘訣です。君たちの将来が、幸せで潤いのあるものであることを、心から願います。

卒業、おめでとう。